

## 松浦理英子『犬身』論(Ⅱ) —— 性愛観と人間関係の到達点

百瀬 奈津美 MOMOSE, Natsumi

はじめに

『ゲストハウス』(第4号、二〇一二・四)掲載の拙論「松浦理英子『犬身』論(Ⅰ) —— 先行作品考察」(以下、『犬身』論(Ⅰ))では、『犬身』を論じる前段階として松浦氏の性愛観と、『犬身』に至るまでの著作(本論ではこの作品群を「先行作品」と呼ぶ)の中から考察される登場人物の特徴や人間関係の描かれ方をまとめた。

本論では、『犬身』論(Ⅰ)の内容を適宜引用しつつ、本題である、『犬身』における性愛観と人間関係の描写の到達点を説明する。

### 第一章 『犬身』の梗概と登場人物

『犬身』の主人公・八束房恵は幼い頃から「犬化願望」を持っている。この「犬化願望」というのは、本来自分は犬であり、あるべき姿になりたいというものだ。房恵はこの「体は人間、心は犬」という体と心の種の不一致を、性同一性障害になぞらえて「種同一性障害」と名付けてい

る。房恵は心の種が犬であるから、種族の違う「人間の誰にも、男にも女にも、恋愛感情や性的欲求を抱かない」。だからといって、房恵が恋情や性欲を抱く相手が犬という訳ではない。房恵が持っているのは、「好きな人間に犬を可愛がるように可愛がってもらえれば、天国にいるような心地になる」という嗜好だ。房恵はこの性的指向を「ドッグセクシュアル」と名付けている。犬となり犬として触れられることを望む房恵だが、それが実現不可能なファンタジーであることは重々承知している。

そんな房恵の前に、「犬の飼主として理想的な女」・玉石梓が現れる。梓とその飼犬・ナツの関係は、房恵にとって理想の飼主と飼犬の関係であり、梓に出会ってからの房恵は、「玉石梓の犬になりたい」と、より具体的に「犬化願望」を抱くようになる。

具体的になった「犬化願望」は、バー(天狼)のマスター・朱尾猷によって叶えられる。自称「魂のコレクター」の朱尾は「半人半犬」の房恵の魂に興味を持つ。朱尾は、いくつかの条件付きで房恵を本物の犬に変えて梓の下に送り込む代わりに、幸せな犬を送ることができた時に

は房恵の魂をもらう、という取引を持ちかける。条件を呑み本物の牡犬となった房恵は、朱尾から様々な手助けを受けながら梓との生活を開始する。

こうして、犬になった房恵は「フサ」と名付けられ、梓の下で理想的な飼犬としての生活を始める。しかし間もなく、房恵／フサは梓が家庭に問題を抱えていることを知る。長年にわたり梓に性的虐待を続ける兄・彬、息子ばかりを溺愛する母親、家での発言権が弱く、やがて失踪してしまう父親。歪な家庭の中で育った梓は他人に心を開くことができず、「人間相手にはまず夢なんか見ませんよ」と陰気に笑うこともある。梓は飼犬との交流に心の癒しを求めており、房恵／フサはそれに精いっぱいこたえようと犬らしい振る舞いをする。

『犬身』の主人公・房恵／フサは、「ドッグセクシュアル」というセクシュアリティを付されている。本稿では、何ものに対しても性的欲求を抱かず、ただ好む相手に触れられることで快楽を感じるというこのセクシュアリティが、物語上で担う機能を考察したい。また、『犬身』の中心であるといえる房恵／フサと梓の二者関係、そして、朱尾を加えた三者関係についても考察し、『犬身』における性愛観と人間関係の描写の到達点を説明していきたい。

## 第二章 「ドッグセクシュアル」という性愛観／犬になるといふこと

### 第一節 先行作品における主人公の特徴

『犬身』論（Ⅰ）<sup>1</sup>で考察したように、登場人物達に付された性愛観やセクシュアリティが機能するようになる『セバスチャン』以降の主人公は皆、自身の性別や性行為における性器結合への思い入れが希薄であ

るといふ性愛への姿勢を持っている。

主人公達は自身の性に対して自覚や関心を持たないことの延長として、他者の性別にも無関心である。性に無関心であるといふことは、性別に付随する権力、つまり男根主義にも無関心であることを示す。

性行為における性器結合への思い入れの希薄さは、性器結合中心主義の批判である。松浦作品の主人公達は、パートナーが女性であることから性器結合をすることがなく（望むこともなく）、男性がパートナーである時でも、積極的に性器結合を目的とした性行為を行おうとはせず、むしろ性器結合を目的とすることに疑問を感じる。松浦作品の主人公達は、性器結合中心主義には属さないのである。

このように主人公達は、松浦氏の批判する男根主義と性器結合中心主義から除外されている。そして、パートナーと出会う親密さを求める中で皮膚感覚的な快楽を見出し、その可能性を体現していくのである。この特徴は、『犬身』の主人公・房恵／フサにも該当する。

### 第二節 「ドッグセクシュアル」

房恵もまた、自身の性別や性行為における性器結合への思い入れが希薄な人物である。自分は本当は犬であると考える房恵は、女であるといふこと以前に人間という種であることにさえ重要性を見出していない。性行為に対しても、「口説きにかかる人間がいると、わたしとのセックスは獣姦なのに、わたしが人間の姿をしているばかりにわからないんだ、と相手が気の毒」になることから、そもそも犬である自分が人間と性行為をすることへの違和感を抱いていると分かる。房恵は「自分は犬である」という前提から、性別にも性行為にも無関心である。

魂が犬であるから「人間の誰にも、男にも女にも、恋愛感情や性的欲

求を抱か」ない房恵にも、「ドッグセクシユアル」というセクシユアリティが付されている。「ドッグセクシユアル」とは房恵による造語であり、その概念も房恵によって作られたものである。「ドッグセクシユアル」について、房恵は次のように説明している。

「その通りよ。こういうわたしにセクシユアリティというものがあるとしたら、それはホモセクシユアルでもヘテロセクシユアルでもない、これは今自分でつくったことばだけど、ドッグセクシユアルとでも言うべきじゃないかと思う。好きな人間に犬を可愛がるように可愛がつてもらえれば、天国にいるような心地になるっていうセクシユアリティね。そして、犬だから相手の人間の性別にはこだわらない、と。これで納得してもらえる?」

「ドッグセクシユアル」において真つ先に排除されるのは、ヘテロセクシユアル、ホモセクシユアルという恋愛感情や性的欲求を感じる性を限定するセクシユアリティだ。こうした性的指向に関するセクシユアリティの排除は、「犬だから相手の人間の性別にはこだわらない」という房恵の主張を補強するものとなる。また、「人間の誰にも、男にも女にも、恋愛感情や性的欲求を抱か」ない房恵には、バイセクシユアルも該当しない。性的指向に関するセクシユアリティの排除は、「ドッグセクシユアル」が相手との関係に恋愛感情や性的欲求を介在させず、純粋な好意のみを相手に向けるセクシユアリティであることを意味すると考えられる。「ドッグセクシユアル」のもう一つの特性は、「好きな人間に犬を可愛がるように可愛がつてもらえれば、天国にいるような心地になる」とい

うものだ。これはそのまま、飼主が飼犬にするように愛情を込めて撫でてほしいという欲求である。このことに関し、朱尾は次のように言う。

「いやいや、ドッグセクシユアルという概念は興味深いんですけどね、それはたしてセクシユアリティの名に値するの、か、という疑問が浮かびますね。だって、あまりにも基本的な快樂ではありませんか、撫でられて感じる気持ちのよさって。子供だったらそれだけの気持ちよさで満足するでしょうけどね。たいていの人は、いわゆるノーマル、アブノーマルを問わず、成長するにつれもつと他の快樂にも目覚めて行くものだと思うんですが、あなたには快樂の基本形しかない?」

朱尾が指摘するように、「ドッグセクシユアル」の房恵が欲する「撫でられて感じる気持ちのよさ」とは、「快樂の基本形」である。ここで「快樂の基本形」と言い切ることができるのは、「ドッグセクシユアル」が、種の違う人間である相手に性的欲求を覚えないという前提があるためだ。

以上から、房恵の持つ「ドッグセクシユアル」とは、松浦氏が主張する皮膚感覚的な快樂と合致するものであると考えられる。『『大身』論(Ⅰ)』でも触れたように、松浦氏は皮膚感覚的な快樂について「必ずしも性行為に結びつかない、性的欲求に導かれて起こるわけではない、好きな人と軽くスキンシップすれば非常に気持ちがいい」(『文学とセクシユアリティ』)と説明している。「相手の人間の性別にはこだわらず、「性行為に執着はな」く、純粋に「快樂の基本形」である好きな相手

から「撫でられて感じる気持ちのよさ」を求める房恵は、皮膚感覚的な快楽を嗜好する人物であると言える。

また、皮膚感覚的な快楽を嗜好する「ドッグセクシュアル」は、男根も性器結合も必要としない。さらに房恵／フサは犬であるために人間との性行為を必要とせず、牡犬となつてからは去勢され、本格的に性行為とは無縁な存在となる。房恵／フサは性行為への欲求を持たず、去勢され性器結合の可能性をそぎ落とされ、男根主義と性器結合中心主義から精神的にも物理的にも除外された存在となっている。

以上から、房恵／フサは今までの登場人物よりもさらに一歩進んだレベルで男根主義と性器結合中心主義から除外されていることが分かる。そして、『ナチュラル・ウーマン』の容子や『親指Pの修業時代』の一実が恋人との性行為を通すことで知った皮膚感覚的な快楽を、「ドッグセクシュアル」というセクシュアリティによってあらかじめ知っている人物である。つまり、房恵／フサは徹頭徹尾皮膚感覚的な快楽の可能性を主張するために性愛観とセクシュアリティを付された人物であると言える。ここまで、房恵／フサの特徴と、特徴を通して描かれる性愛観を考察した。これらを踏まえ、第三章では『犬身』の中心とも言える、犬になつた房恵／フサと梓の二者関係、そして、そこに朱尾を加えた三者関係について考察する。

### 第三章 房恵／フサ・梓・朱尾の三角関係

#### 第一節 隠された「人間同士の関係」

考察に先立ち、犬になつた房恵／フサと梓の二者関係は、犬と人間の関係ではなく、本人達には自覚のない人間同士の関係であることを指摘

しておきたい。なぜならば、房恵は犬の魂を持ち、フサという犬の身体を得たが、人間社会の中で三十年生きてきた中で培われたその精神構造や思考は人間のものと言つて良いためである。フサが完全な犬でないことは、『犬身』の先行研究でも指摘されている。前田墨氏、斎藤美奈子氏、佐藤裕子氏、辻本千鶴氏の論文において、フサは純粋な犬ではないと論じられている。いずれも論拠として、房恵／フサが人間としての思考力を備えたまま犬となつたことと、本来犬であれば行えないはずの言語によるコミュニケーションを朱尾との間に持ち続けていることを挙げている。中でも辻本氏の「身体は犬であっても、感受性や思考能力や、朱尾との間に限定的な会話しかないと言つても、言葉すら保持しているフサと梓が交流を深めても、種を超える関係と言えるだろうか。」（松浦理英子『犬身』論——ジュネとガーネットの受容を視座として）という問いは、犬になり、犬として梓との距離を詰めようと望む房恵／フサのはらむ矛盾を突いている。確かに、房恵／フサと梓は肉体の上では種の違いがある。しかし、感受性や思考能力が人間そのものの房恵／フサを、違う種と言いつけることはできるだろうか。

犬の姿を得ても、房恵／フサは本物の犬にはなり得ない。房恵／フサであることを知るよしもない梓は房恵／フサを犬として扱うが、房恵／フサは自身を完璧に犬として扱うことができていない。看板の文字を読む、梓の作品を鑑賞する、パソコンのキーボードを操作するといった行動を自然に取つてしまう房恵／フサには、人間の時の習慣が染みついている。また、彬の虐待に傷つく梓を前にすると、「梓の心情を人間並に察している」と知られは困るので、「苦心の演技」で犬らしい行動をとり、「犬のやりそうな慰め方はないかと知恵を絞つて」行動する。考えなければ

犬としての行動ができない房恵／フサは、本物の犬とは言い難い。

本物の犬になったと信じているものの、実のところは人間の精神を保持したままの房恵／フサと、犬と思つて接する相手が実は人間であることを知らない梓。この二者関係は、互いが互いにこの二者関係を人間関係ではなく犬と人間の関係と誤解することで成立している。そのため、この二者関係は一見犬と人間の関係に見えるが、その本質は人間同士の関係なのである。

### 第二節 房恵／フサと梓の二者関係が描くもの

結論から述べると、犬になった房恵／フサと梓の二者関係は、皮膚感覚的な快楽を描くことに特化した関係である。この二者関係は、房恵／フサの「ドッグセクシュアル」に基づく欲求を満たすために築かれた関係と言っても過言ではない。

房恵／フサは犬への変身を決心した時に望んだように、梓と「会話や性行為に頼るのではなく、犬と人間の関係に特有の、気持ちと気持ちをじかに重ねるような交わり」を深めていく。それは、日々梓から世話をされることであり、梓に愛情を込めて撫でられることであり、彬の虐待に傷ついた梓に寄り添い癒すことである。房恵／フサが二者関係に求めるのは、自身の「ドッグセクシュアル」を満たす皮膚感覚的な快楽を伴う交流であり、梓は家庭問題で傷ついた心を癒すための交流を二者関係に求めている。梓が犬に対して求める交流もまた、皮膚感覚的なコミュニケーションなのである。

房恵／フサと梓は互いに皮膚感覚的なコミュニケーションを求め合い、それを体現している。そして、この二者間では、言葉も性行為も成立せず、完全なる皮膚感覚的な交流しか行われていない。以上から、この二

者関係では、皮膚感覚的なコミュニケーションのみが描かれていると言える。

### 第三節 二者関係の不足と、三者関係の構築

望む二者関係を得ることのできた房恵／フサだが、満足することはできなかった。房恵／フサは人間の時の感性や思考力を保持したままであり、梓が家族から虐待を受ける様を看過することができないためだ。梓との皮膚感覚的なコミュニケーションの中には、虐待に傷ついた梓を慰めることによつて得ることのできた快楽もある。それでも、やはり房恵／フサは好意を持つ梓が幸せな生活を送ることを願い、梓の状況の改善を望む。しかし、言葉も持たない犬の姿では、梓の家庭問題に具体的な働きかけをすることはできない。梓の実情を知つた房恵／フサは人間の姿と言葉を捨て、梓と人間としての関係を築かなかつたことを後悔する。

「犬化願望」を叶えて犬となり、梓との飼主と飼犬の関係を手に入れた房恵／フサは、ここに来て梓との間に人間同士の関係を求めるのである。二者関係には不足が生じる。「乾く夏」において幾子と彩子の二者間では性器結合が不可能だったように、房恵／フサと梓は言語コミュニケーションが不可能である。「乾く夏」では、二者関係に悠志が加わることで状況が打開された。『犬身』では朱尾が加わることで三者関係が形成される。

先行研究においても房恵／フサ、梓、朱尾による三者関係への言及がなされている。蓮實重彦氏は三角関係では暗黙の内に「他者の肉体的な所有」が前提とされると述べた上で、『犬身』では房恵の「非性的な振る舞いが、『三角関係』という葛藤構造を無効にすることになる」と指摘している（ある「なだらかなあられもなさ」について——松浦理英子『犬

身』論)。また、内藤千珠子氏は、房恵／フサと梓の二者関係は房恵／フサが「犬化願望」を叶え「ドッグセクシュアル」という欲望を結実させるためには、梓という「犬になったわたしを、わたしに代わって撫で、触り、戯れてくれる誰か」が必要であると述べている。そして、その二者関係に朱尾が加わるのは、梓の知らぬところで房恵からフサとなり、またフサから新たな子犬となって梓に寄り添い続ける房恵／フサの「魂の同一性を保証する」ためであると指摘している(「わたしは犬になり、あなたはわたしになる」松浦理英子『犬身』)。

この二つの論に対して、筆者は房恵／フサ、梓、朱尾の三者関係とは、皮膚感覚的な関係のみを築く房恵／フサと梓の二者関係に朱尾が加わることで、二者関係では行うことができなかった言語コミュニケーションが補なわれ、前提となる二者関係がさらに深化する構造を持っていることを提示したい。

朱尾は、二者関係に不在となった言語コミュニケーションを補う役割を担う。房恵に代わり朱尾が梓と言語コミュニケーションを取ることで、皮膚感覚的なコミュニケーションでは引き出すことのできなかった梓の心情や考えを引き出し、それを房恵／フサと共有させる。朱尾が引き出す梓の本音には、房恵／フサが知りたいと欲する梓の家族への思いだけではなく、時には「フサがいることがつらくなります」という房恵／フサとの関係を否定する言葉も含まれる。房恵／フサは朱尾を媒介として多角的な梓の言葉を受け止め、梓に対する理解を深める。朱尾が言語コミュニケーションを仲介することで、房恵／フサは本来二者関係だけでは得られなかった情報を手に入れることができ、間接的に梓と言語コミュニケーションを実現させている。朱尾が加わることで、房恵／フサと

梓の二者関係は深化を見せている。

『犬身』論(Ⅰ)でまとめたように、先行作品における二者関係と三者関係は、「特定の人間関係や性的関係について考察するための場」となっており、築かれた二者関係を何らかの形で深化させるために三者関係が構築される。この三者関係には二つのパターンが存在し、一つは「前提となる二者関係では行うことの出来ない行為を補完するために三人目の人物を引き入れ、主人公と三人目の人物とで構築された関係から得られたものを前提となる二者関係にフィードバックしていく」関係、もう一つは「複数の二者関係を構築し、それらを対比することで自身の持つ性愛観を深めていく」関係である。『犬身』の房恵／フサ、梓、朱尾の三者関係は前者に近い。

房恵／フサと梓の皮膚感覚的な快楽を媒介とした二者関係は、朱尾を引き入れた三者関係を通すことで更に深化する。房恵／フサと梓の二者関係は、言語コミュニケーションが排除された皮膚感覚的なコミュニケーションによって成り立ち、皮膚感覚的なコミュニケーションで行える以上の深まりはできない。そこで、言語コミュニケーションを担う人物として朱尾が加入し、三者関係が構築される。ここで注目したいのが「三人目」となる朱尾の扱いの違いだ。これまでの松浦作品では、三者関係に引き入れられた「三人目」は、主人公としか緊密な関係を築かず、また前提となる二者関係を深化させるために「利用されている」と言っても良い扱いだっただ。それに対し、『犬身』の朱尾は梓との間に緊密な関係を築き、房恵／フサと協力し、能動的に房恵／フサと梓の関係が深化するよう手助けしている。

『犬身』における三者関係は、積極的に前提となる二者関係を深化さ

せることを目的として、後から構成された主人公と「三人目」による二者関係が緊密な関係を構築する関係である。『犬身』以前の作品において構築された二者関係の深化のための三者関係では、引き入れられる「三人目」は三角関係に引き入れられ利用されることに反抗的である。これには、「葬儀の日」の「少年」、「乾く夏」の悠志、「肥満体恐怖症」の水木が該当する。これら三作品は松浦氏の初期作品であり、これ以降の『セバスチャン』からは、登場人物に男根主義や性器結合中心主義に批判的なセクシュアリティが付され、「複数の二者関係を構築し、それらを対比することで自身の持つ性愛観を深めていく」関係を築いている。『犬身』においては、房恵／フサと梓の皮膚感覚的な二者関係、朱尾と梓の言語的な二者関係、房恵／フサと朱尾の房恵／フサの欲求を満たすための共謀関係という複数の二者関係の構築と、それを重ね合わせることで得られる房恵／フサと梓の関係の深化という形をとっている。

#### 第四章 『犬身』の到達点

以上、『犬身』における性愛観と人間関係の描写の考察を行った。

性愛観の考察では、主人公・房恵／フサがこれまでの松浦作品の主人公たちとは一線を画した設定を付されていることが分かった。松浦氏の著作の登場人物はあらかじめ、松浦氏の批判する主義からは除外されている。その上で、主人公たちは恋愛や性行為、自身の体に起こった異変等を通して、男根主義と性器結合中心主義を批判していく。そして、皮膚感覚的な快楽と出会い、その可能性を体現していくのである。

『犬身』では、房恵／フサは今までの登場人物よりもさらに一歩進んだレベルで男根主義と性器結合中心主義から除外されている。そして、

皮膚感覚的な快楽を、「ドッグセクシュアル」というセクシュアリティによってあらかじめ知っている人物である。つまり、房恵／フサは徹頭徹尾皮膚感覚的な快楽の可能性を主張するために性愛観とセクシュアリティを付された人物であると言える。松浦氏が登場人物に付す性愛観とセクシュアリティは、男根主義と性器結合中心主義への批判を終え、松浦氏の主張する皮膚感覚的な快楽の体現のために付されるように変化していると言える。

人間関係の描写では、『犬身』における人間関係がこれまでの手法の混合であることが分かった。『犬身』では、これまで松浦氏が取ってきた二つの人間関係の描写が、多少の変更を加えつつ組み合わせられ、結果松浦氏の主張を描く上で相乗的な効果を表していると言える。自身の性愛観、ひいてはセクシュアリティの求める欲求を深めるために構築される二者関係は、朱尾と梓の二者関係という主人公・房恵／フサが直接には関わらない関係の構築も許容し始めた。そしてこの二者関係は房恵／フサと朱尾の共謀する二者関係によって共有され、房恵／フサと梓の二者関係の深化に利用される。構築される二者関係も三者関係も、最終的には皮膚感覚的な快楽を媒介とした二者関係の深化に包括されていくのである。

以上から、『犬身』における性愛観の描写は、男根主義と性器結合中心主義への批判を終え、松浦氏の主張する皮膚感覚的な快楽に焦点を置いたものに変化したこと、また、人間関係の描写は、先行作品において使用されてきた二つのパターンの人間関係を混合して使うことで、構築される二者関係も三者関係も、その前提となる二者関係をさらに深化させる働きを持つという地点に到達していることがわかった。

おわりに

平成二十四年六月、実に五年振りの新作、「奇貨」（『新潮』）が発表された。松浦作品では初の男性の語り部・本田和将は四十五歳の私小説作家であり、「奇貨」自体が本田の私小説として書かれている。「性欲が強くない、男性性が薄い」本田は、女友達から「同性同士みたいに話せるから一緒にいて楽」と評される人物である。本田とルームシェアをしている七島美野は三十五歳のOLで、レズビアンである。二人は恋愛感情や性的関係のない純粹な友人関係だが、七島に他に女友達ができたことで、本田は友人としての優先順位を下げられてしまう――。

「奇貨」には様々なキーワードがちりばめられている。（半端ヘテロ）、（攻め）、（受け）、（萌え）、（友達ロマンス）。これら、松浦氏の造語とサブ・カルチャー用語という概念的な単語群で考察されるのは、やはりセクシュアリティと人間関係である。「奇貨」では、ヘテロセクシュアルやホモセクシュアル、サディストやマゾヒストといった既存のセクシュアリティに当て嵌まらない性的指向や性的欲求に名前を付け、人間関係の描写に（萌え）という表現を使用することが試みられている。これらの試みは、恋愛関係だけでなく、「友達」という人間関係への欲求も描き出している。

松浦氏によるセクシュアリティと人間関係の考察は、作品を追うごとにテーマを変えるものの、その根底にあるのは常に、好意を持つ相手と人間関係を築く際の喜びと葛藤である。松浦氏の今後の著作にも注目していきたい。



## \*引用・参考文献

〈松浦理英子氏の著作〉……本文の引用は文庫版から行った。

『葬儀の日』（河出書房新社、一九九三年一月）

『セバスチャン』（河出書房新社、一九九二年七月）

『ナチュラル・ウーマン』（河出書房新社、一九九一年十月）

『親指Pの修業時代（上・下）』（河出書房新社、一九九五年九月）

『裏ヴァージョン』（筑摩書房、二〇〇七年十一月）

『犬身』（朝日新聞社、二〇〇七年十月）

『奇貨』（『新潮』二〇一二年六月）

（文庫版）

『葬儀の日―初期作品集1』（河出書房新社、一九九三年一月）

『セバスチャン』（河出書房新社、一九九二年七月）

『ナチュラル・ウーマン』（河出書房新社、一九九一年十月）

『親指Pの修業時代（上・下）』（河出書房新社、一九九五年九月）

『裏ヴァージョン』（文藝春秋、二〇〇七年十一月）

『犬身』（朝日新聞社、二〇一〇年九月）

（エッセイ）

『文学とセクシユアリティ―』（『早稲田文学』一九九四年三月）

『永遠に犬的なるもの、われらを導いて行く』（『一冊の本』二〇〇七年十二月）

〈『犬身』の書評・先行研究〉

蓮實重彦「ある「なだらかなあられもなき」について——松浦理英子『犬身』論」

（『小説 tripper』二〇〇七年冬季）

茅野裕城子「甘い「犬の蜜」の部屋」『群像』二〇〇八年一月）

前田壘「百年の狗独 松浦理英子『犬身』をめぐって」『群像』二〇〇八年二月）

清原康正「新世紀文学館(51)動物奇想ファンタジー」

（『新刊展望』二〇〇八年三月）

斎藤美奈子「『犬身』、闘わない犬の物語」『文學界』二〇〇八年五月）

佐藤裕子「犬尽くしのアイロニー——松浦理英子『犬身』論」

（『玉藻』二〇〇九年三月）

内藤千珠子「わたしは犬になり、あなたはわたしになる 松浦理英子『犬身』」

（『小説の恋愛感觸』みすず書房、二〇一〇年七月）

辻本千鶴「松浦理英子『犬身』論——ジュネとガーネットの受容を視座として」

（『言語文化論叢』二〇一一年八月）